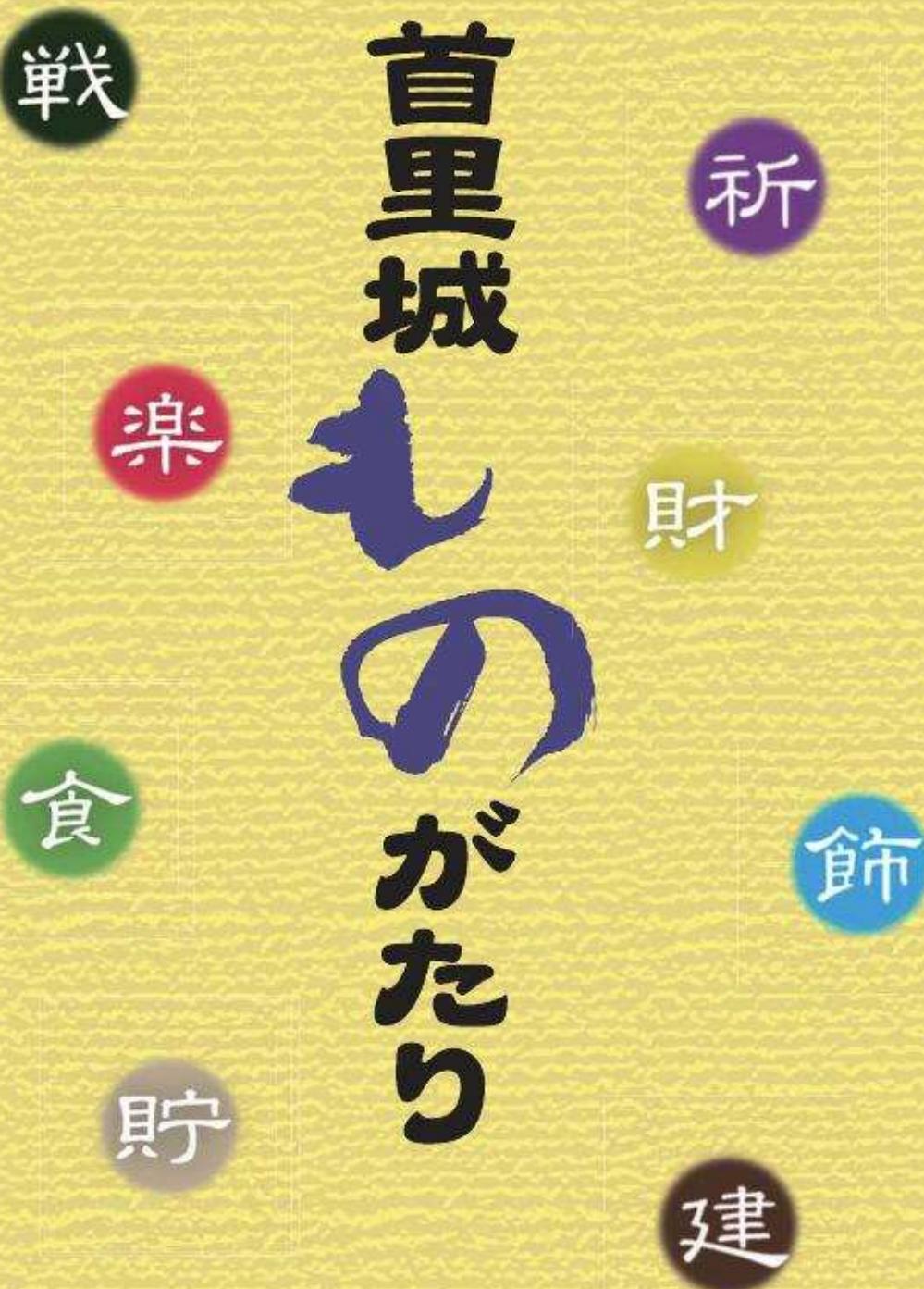


平成 22 年度重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展



開催期間 平成 23 年 1 月 29 日(土)~2 月 13 日(日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

目 次

ごあいさつ	1
首里城「京の内」とは	2
首里城“もの”がたり展示概要	3
「食」～食事・酒茶の痕跡～	4
【column1】首里城の高級食材	5
「貯」～貯蔵・運搬の痕跡～	6
【column2】グスク時代の酒と器	7
「飾」～絢爛・美装の痕跡～	8
【column3】「天目の道」琉球	9
「建」～焼失・再建・重修の痕跡～	10
「戦」～群雄割拠の痕跡～	11
【column4】琉球王国の兜鉢立物	12
「祈」～祈願・祭祀の痕跡～	14
「財」～大交易時代の痕跡～	15
「楽」～楽・遊・優雅の痕跡～	16
【column5】首里城のペット	17
重要文化財指定基準	18
重要文化財指定の名称と指定理由	19
重要文化財首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	20

【凡 例】

1. 本書は、重要文化財公開首里城京の内跡出土品展～首里城“もの”がたり～（開催期間 2011 [平成23] 年1月29日から2月13日）を補完するものとして編集・作成したものである。
2. 企画及び図録原稿の執筆は金城亀信、仲座久宣、新垣力が担当した。
3. 掲載写真の撮影は矢舟章浩、伊佐えりなが行った。また、本書に掲載されている写真・図面等の無断使用は固く禁ずる。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本書に記載されている資料名が一部異なるものが存在する。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものである。

ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」518点と金属製品及びガラス玉一括の資料を所蔵しています。特に陶磁器の資料は14世紀中頃～15世紀中頃に中国、東南アジア、日本で生産された貿易陶磁器で、世界でも報告例のない「元青花八宝文大合子」や「紅釉水注」などを含む琉球王国の大交易時代の繁栄を示す貴重な資料です。

首里城京の内跡の発掘調査は、国営首里城公園復元整備事業に伴う遺構確認調査として平成6～9年度まで実施されました。その内、平成6年度の遺構確認調査により倉庫跡(1459年の火災で焼失)の一角から出土したこれらの陶磁器は、我が国の歴史上、意義深く、かつ学術的価値の特に高いものとして平成12年6月27日付で国の重要文化財(考古資料)に指定されました。これらの貴重な品々は東南アジア・朝鮮・日本などとの交易によって琉球王国へもたらされ、琉球国王即位式などの王家の特別な儀礼や祭祀、あるいは中国から来琉した冊封使を歓待する宴などに供されたと思われます。

今回の企画展では、「首里城“もの”がたり」と題し、「食」「飾」「戦」「樂」などの8テーマを設け、京の内跡の代表的な出土品をはじめ金属製品やガラス玉にも焦点をあて、首里城内の特徴的な出土品もあわせて展示をおこなっています。地中に埋もれていた一つ一つの遺物を多くの出土品と組み合わせることによって、往時の首里城の生活や文化、琉球王国を取り巻く近隣諸国との交易や交流など様々な事象を窺い知ることができます。

この機会に、本県の文化財の魅力や価値を実感していただき、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」に対するみなさまのご理解が深まれば幸いに存じます。

平成23年1月29日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 守内 泰三

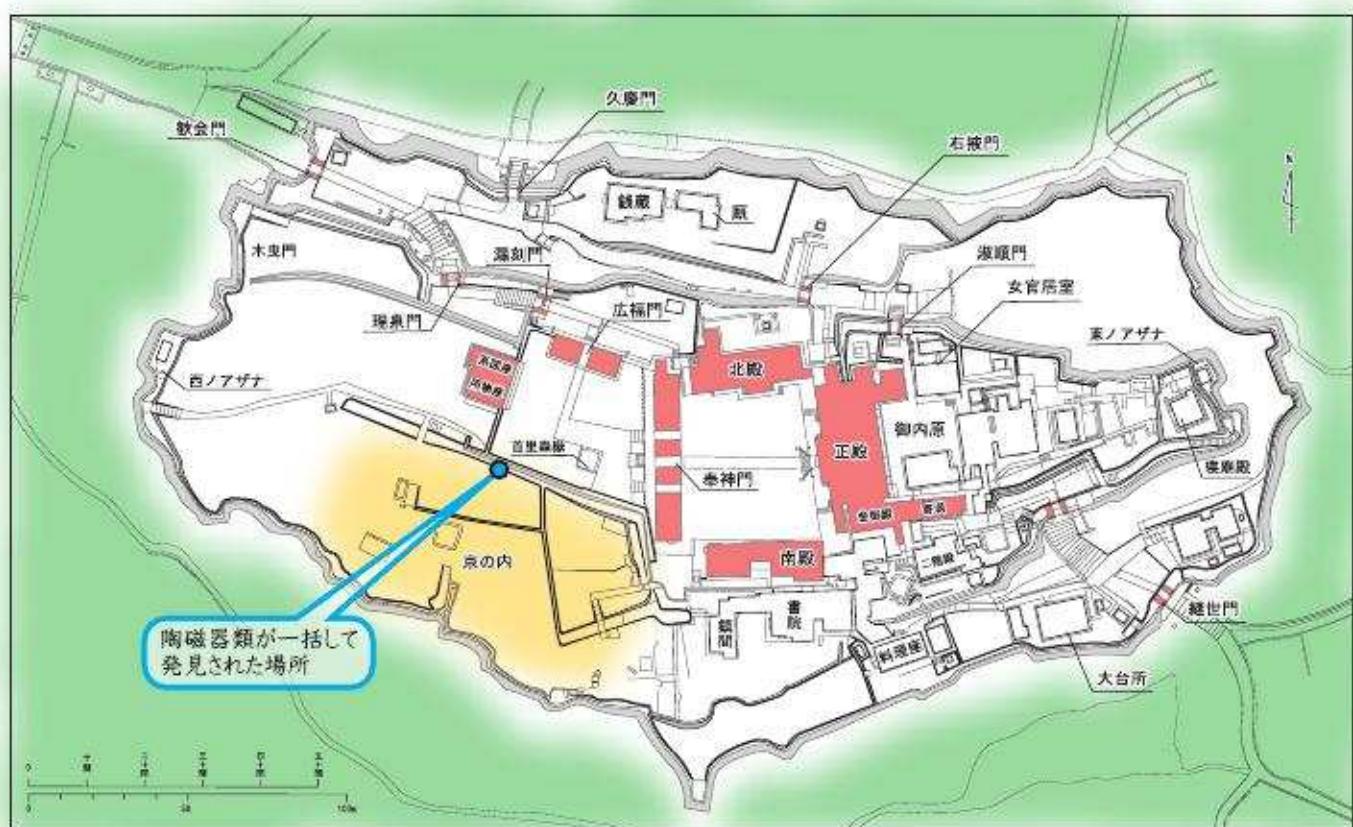
首里城「京の内」とは

首里城内は、政事を司る正殿一帯と、国王のプライベート空間である御内原、そして聖域としての空間である京の内に大きく分けることができます。京の内は、首里城内の南西側を占める面積約 5,000m²の区画を指します。

琉球王国の正史、『中山世鑑』に記されている琉球の創世神話によると、天上に住む天帝が琉球の創世神アマミクに指示し、国頭は辺戸の安須森から最良の聖地を求めながら南下しつつ、今帰仁カナヒヤブ、知念森、斎場嶽、藪薩の浦原、玉城アマツヅ、久高コバウ森を巡り、そして首里城の首里森グスク、真玉森グスクの御嶽を創設するとともに、琉球の島々をつくらせます。この京の内は、アマミクが最後に降り立った場所とされ、琉球最高の聖域として認めた場所なのです。そのため、京の内の「京」は、靈力（セジ・シジ）と同義とされています。歴代の国王は、この最適の地に造った首里城を行政と祭祀の中心としました。

王府の神女・女官関係の文書がまとめられた『女官御双紙』には、首里城内に 10 箇所の御嶽があるとされています。これらは城内の東西南北、南東、南西、北東、北西のほか、上下に配置されており、ありとあらゆる方向の守りとしたことが考えられています。これらの御嶽において、祭祀を司る多くの神女たちは、その靈力により国王が未永く優れた存在として、長寿が得られるよう祈りました。この様子は、『おもろさうし』の中でうたわれています。

このような背景から、首里城の中でも特別な空間であった京の内跡から出土した遺物の数々は、城内で執り行われた祭祀に用いられた可能性を示しているのです。



考古学の世界では、遺跡から出土する遺物を、陶磁器や土器、石器、金属製品のように材質で分けて取り扱っています。しかしこれらの遺物は、もともと食事や貯蔵に用いる容器や、装飾品、儀礼用、武器・武具など、さまざまな目的で実際に用いられていたものなのです。

今回の企画展では、首里城京の内跡から出土した遺物を中心として「食」、「貯」、「飾」、「建」、「戦」、「祈」、「財」、「楽」の8つの用途・機能別に展示を行い、出土品の使用法を考えることにより、当時の首里城での生活を想像してみたいと思います。なお、今回の機能別展示において、京の内跡出土品で補えない部分に関しては、より理解を深めてもらう目的で、首里城内の各地区及び首里城周辺の遺跡から出土した資料を加えて展示を行いました。

遺物に関する理解をより深めてもらうために、首里城から出土する主な遺物を材質ごとに解説します。

① 陶磁器

陶磁器類はその大半が破片の状態で出土します。これらは火災などによる変形・溶着のほか、一部の色絵や軟質陶器の釉薬が剥落・変色することはあるものの、その多くは状態を変えることなく地中に残されます。陶磁器には陶器と磁器があり、陶器は土を成形して焼成したもので、磁器はカオリンと呼ばれる鉱石を粉碎・粘土状にしたものを作成して高温で焼成した焼物を指します。首里城跡は国内有数の陶磁器出土遺跡として知られています。その産地は、国内外を問わず多岐にわたります。これらの器種は、碗・皿などの日用雑器から、花瓶や器台などの大型品・高級品まで種別もバラエティーに富みます。陶磁器は器形や文様により細かく編年がされており、そこから遺構の概ねの年代を知ることができますとともに、当時の生活様式や海外との交易の様子を知る手がかりとなります。

② 金属

金属製品は鉄製と青銅製が大半を占め、その他近世以降になると錫製、真鍮^{チムヂュウ}製がみられるようになります。素材は製品や用途により使い分けが行われているようです。この遺物は素材に関わらず腐食（錆化）します。鉄製品は、内部に錆が浸透すると原形をとどめないほど破損・分解することがありますが、青銅製品の腐食は鉄製品に比して軽度である場合が多いことから、クリーニングにより形状や文様がよみがえる場合があります。鉄製品は主に釘をはじめとする建築材や武具の一部に用いられ、青銅製品は装身具や武具・建築材やその装飾に関わるもの、祭具、錢貨の素材として用いられています。

③ ガラス

ガラス製品はビーズや勾玉などがあります。これらは埋蔵環境により変色や劣化することがあります、往事の青、赤、黄などの色調を残したまま出土することもあります。京の内跡からは整然と連なり溶着した塊の状態で出土しているため、同種の玉を糸などで連結し、装身具や祭具として使われたと考えられます。しかし、その大半が単体での出土であり、この場合用途は判然としません。現存する絵図資料や伝世品には、器物の全面にビーズをあしらった御玉貫^{ウタマサキ}などの祭具も見られますので、これらの装飾として使用されたことも考えられます。

④ 石

首里城から出土する石製の遺物は大きく2種に分けることができます。ひとつは、建造物や彫刻にかかる製品を指し石造製品と称しています。おもに礎石や欄干部材など彫刻されたもので、素材は細粒砂岩や琉球石灰岩等の沖縄の石材のほか、鹿児島の凝灰岩や中国の輝緑岩（青石）を用いた製品もみられます。これに対し、小型の製品を石製品と称し、器物や玉などは硬質の石英や玉髓などを精緻に加工しています。そのほか、砥石や硯、石臼、石球などの製品がみられます。

⑤ 骨

動物の骨を加工した製品は、古くは縄文時代から存在しますが、首里城でもわずかながら出土しています。厚手で硬質なウシの四肢骨やジュゴンの肋骨を用いた製品があり、骨鑓^{ヒツヅク}や骨ベラのほか、細かい彫刻が施された製品も出土しています。



食事・酒茶の痕跡

陶磁器のほとんどが「食」に関する遺物といえます。特に中国産の青磁をはじめとする碗・皿類は首里城跡だけでなく集落遺跡からも多数出土しており、食器として広く普及していたことがうかがえます。調理具としては擂鉢があり、日本の備前焼を中心に中国産も出土しますが量的に少なく、一定量確認されるのはグスクや寺院などに限られます。

酒器や茶器も陶磁器が大多数を占めており、その出土量や多様さは首里城ならではといえます。酒器は酒会壺・水注・杯が挙げられますが、水注などは中国産の紅釉水注や瑠璃釉水注のように、祭祀的な用途が想定されるものもあります。茶器の代表は天目と呼ばれる中国産の黒釉陶器碗で、当時の日本と同様に抹茶を嗜んでいたのでしょうか。

金属製品は碗・杯・鉢・匙などがみられますが、いずれも普段使いの道具ではなく、特殊な用途が想定される製品と考えられます。



碗・皿
(中国産青磁・白磁・染付・色絵)



大合子・盤・鉢
(中国産染付・青磁)
擂鉢 (備前焼)

【column1】 首里城の高級食材



食用にしていた動物の骨
左：ウミガメ、ジュゴン
中：イヌ
右：シカ

フランス料理には、ジビエ (gibier) とよばれる狩猟により捕獲した野生・半野生の鳥獣を指す用語があります。このジビエは、狩猟時期が冬のシーズンに限られた高級食材であり、そのおもな種類は、鳥類にはカモ、シギ、キジ、ハト類があり、獣類ではウサギ、シカ、イノシシなどがあります。首里城跡から出土する自然遺物には、主に獸魚骨を指す脊椎動物と、貝類などの無脊椎動物がありますが、ここでは獸骨、特にジビエの可能性がある動物骨にしぼって解説します。

出土する獸骨の大半は、家畜化されたニワトリやブタ、ウシ、ヤギなどが占める傾向にあります。この中でブタについては、イノシシとの判別がつきにくいものがあり、ジビエとしての特定が困難です。これらの中から、野生種と思われる鳥獣骨を探すと、カモ類のほか、ジュゴンやイルカ、ウミガメなどの骨もみえ、琉球独自といえる海のジビエも味わっていたことがわかります。

そのほか特殊な例として、首里城跡と天界寺跡からは明らかに食材として移入し、半野生の状態で飼育していたと思われる動物の骨が出土しています。それはシカの骨です。沖縄におけるシカは、旧石器時代に生息していたリュウキュウジカなどが絶滅して以来、生息していないものとされてきました。しかし、首里城跡などでシカの骨が出土しているということは、島外から持ち込まれたことを示しており、出土地が限られることも特別な意味合いを持つことがあります。

この件に関し、王国の地誌『琉球国由来記』によると、崇禎年間（1628～1644）に「金武朝貢が薩摩よりシカを持ち帰り慶良間諸島に放した」とする記録があり、これが現在も慶良間諸島に生息するケラマジカにあたることが考えられます。出土したシカの骨は断片的ですが、日本各地に生息するニホンジカや、その亜種の現世標本との比較観察を行った結果、一部は鹿児島県の屋久島に生息するヤクシカに近いとする結果が得られています。この結果は、先述した薩摩から移入したとする記載とも調和的です。

次に、シカを移入した目的ですが、中国からの使節である冊封使をもてなす宴席料理である「御冠船料理」の中に答えがありました。そのメニューには、多くの食材とともに鹿肉の名が記されていることから、シカは食材として移入されたことが考えられます。移入されたという点では、厳密な野生のジビエといえませんが、食用目的で野生のヤクシカを移入し、長期間にわたり島に放ち野生化しているという意味では、広義のジビエと言っても過言ではありません。首里城跡の中でも、御内原北地区のシリ遺構（17世紀前半のゴミ穴）からは、解体時のナイフ痕が残るシカの骨が数点出土しています。遺構が検出された地点は、首里城の大奥といえる御内原内にあることから、そこで生活する王族や女官らが食後に廃棄した可能性があり、御内原で暮らす人たちも、特別な食材であるジビエのシカを賞味していた可能性を示しています。

貯

貯蔵・運搬の痕跡

貯蔵する対象は色々ありますが、最も一般的なのはやはり酒です。当時の沖縄では酒を外国から輸入しており、中国やタイから運ばれていたようです。その際、それぞれの地域で生産された褐釉陶器の壺に納めて輸出されたと考えられますが、この製品が首里城内から大量に出土しています。これらの壺は窯場やサイズに多様なバリエーションがみられることから、酒の種類やランクに関係するかもしれません。また、これらは商品である内容物を運搬するための容器であり、目的地へ到着した後は別の用途で使用されることもあります。時代は下りますが、厨子^{すしがめ}としての使用例などが挙げられます。

酒は賓客の接待や祭祀儀礼などに必須のアイテムであったと思われ、グスク時代を通じて輸入され続けたと考えられます。そのことを裏付けるように、コンテナとして運ばれた褐釉陶器壺は沖縄各地の遺跡から出土します。



酒類の容器に使用された陶器壺と土器蓋

【column2】 グスク時代の酒と器



梅瓶と酒会壺

現在沖縄には約 50 ヶ所の酒造所があり、望めばいつでも酒を飲める環境にあります。しかし、グスク時代の沖縄では飲酒はいわゆる「ハレ」の日に限定された行為で、具体的には賓客を接待するためや、祭祀儀礼などの一環であったと考えられます。またその際に使用された酒も外国産が多くかったようです。

遺跡から出土する陶磁器は食器と考えられるものが大多数を占めますが、酒に関係

する製品も一定量確認できます。最も多いものは中国産やタイ産の褐釉陶器壺で、ほとんどが酒を運ぶコンテナとして海を渡ってきたと考えられます。特にタイからは「香花酒」と呼ばれる酒が沖縄へ輸出されたことが文献からわかつており、この酒を飲んだと思われる冊封使の記録も残されています。当時のタイは漢方薬の材料である蘇木と、高級香辛料である胡椒の主要生産地であったため、琉球は何度もタイを訪れていましたが、「香花酒」もタイと交易する理由の一つだったのでしょうか。酒を運ぶ際には褐釉陶器壺に土器の蓋を被せたと思われ、実際に遺跡からは土器の蓋も出土します。この組み合わせは中国産・タイ産の双方に共通しますがタイ産の例が多く、首里城京の内出土品にはタイ産褐釉陶器壺とタイ産土器蓋のセットが少なくとも 62 個確認されています。ちなみに時代は下りますが、沖縄で陶器生産が開始された 17 世紀前半頃にタイ産褐釉陶器壺を真似た製品がつくられます。この時タイ産褐釉陶器壺は輸入されていませんが、その存在や形態的な特徴がブランドとしての魅力を持っていた証といえます。

この他に宴席へ酒を提供する際に必要な壺、そこから酒を注ぐために用いる水注、実際に酒を飲む時に使用したと思われる杯などがあり、いずれも中国産の青磁や染付が多く確認されています。壺には酒を褒め称える「美酒清香」の字句や鮮やかな草花文が描かれているものが多く、酒席を彩る舞台装飾の役割も果たしたことでしょう。水注と杯については儀礼的な用途も考えられるため概にはいえませんが、山北王の居城であった今帰仁城跡では杯が主郭で最も多く出土するとされ、主郭という空間の利用形態と酒器との関係を考えるうえで貴重な結果といえます。

以上、主に遺跡出土の陶磁器からグスク時代の酒と器について述べてきましたが、やはり今も昔も沖縄にとって酒は重要なアイテムだということがわかります。



瓶・水注・杯

飾

絢爛・美装の痕跡

「飾る」という行為は空間を対象とする場合と、人間を対象とする場合で使用するものが分かれます。前者の場合は陶磁器が多用され、花瓶や植木鉢といった特殊な用途の製品が選択されます。これらは一般に出土量が少なく、当時としても貴重品であったと思われることから、いわゆる威信財としての役割を発揮したと考えられます。また、これらが彩る空間自体が王権を誇示するための舞台装置であったかもしれません。

人間を飾る場合、使用されるものは金属製品やガラス製品に限られます。具体例には簪・指輪・玉などが挙げられますが、簪と指輪は身分にそれほど関係なく、城内でも普遍的な装身具でした。しかし玉は首飾りや玉ハベラに代表されるような、神女組織に属する女性の装束であった例が多いと思われます。ちなみに首里城跡出土の玉については、御玉貯を構成する一部であった可能性も考えられます。



遺物・花瓶・器台
(中国産青磁・染付)



玉類(ガラス製品)
指輪・簪(金属製品)

【column3】 「天目の道」琉球



天目
(中国産黒釉陶器碗)

日本に茶が本格的に伝わったのは鎌倉時代で、臨済宗の開祖である栄西がもたらしたとされています。彼は茶の様々な効能を説いており、時の将軍 源 実朝には二日酔いの良薬として茶を勧めたこともあります。

この茶を飲むための専用器として用いられたのが、天目と称される中国産の黒釉陶器碗です。口縁部を S 字形に折り返す形態は 蟻口とも呼ばれ、熱い内容物が一気に口中に流れ込まないための工夫といわれています。天目は 12 世紀前半から日本へ輸入されますが、全国的な広がりをみせるのは 14 世紀後半以降と考えられます。この頃の天目は茶の湯の世界で「灰被天目」と呼ばれており、福建省の南平茶洋窯で生産されたことが判明しています。形態的には底部の抉りが浅く、高台の脇を水平に削るのが特徴で、沖縄から出土する天目もほとんどがこのタイプです。

現在沖縄県内では約 60 遺跡で天目が出土していますが、最も多く確認されているのはやはり首里城跡です。特に二階殿地区の落ち込み 1 と呼ばれる遺構からは少なくとも 532 個の天目が発見されており、これらは被熱による破損・変形のために廃棄されたと考えられます。天目は他の遺跡では数点～10 点程度しか出土しないため、このような出土状況は当時の琉球国内の需要に応えるためのものではなく、むしろ天目的一大市場であった日本への輸出用にストックしていた可能性が高いと思われます。

その根拠として上記の出土状況以外に挙げられるのが、天目の産地である南平茶洋窯で生産された白磁碗の存在です。この製品は日本での出土量が少なく、沖縄では全域で一定量確認されることから、沖縄が中国との直接貿易を開始した時期を考えるうえで重要な資料といわれていました。またこの製品は天目より登場時期が 1 世紀ほど古く、形態的な類似点も多いため、天目の祖型ではないかとさえ思われます。

以上の推測通りであれば、13 世紀後半頃から南平茶洋窯との関係を有していた琉球が、14 世紀後半以降の日本における天目需要に応えるため、中国からの天目供給ルートとして機能していた可能性が高く、いわば当時の琉球は日本にとって「天目の道」であったといえます。



焼失・再建・重修の痕跡

ちようしう

建物関係遺物 1
上段：鉄釘、かすがい
下段：錠前・鍵



建物関係遺物 2
金属：飾金具
陶磁器：灯明皿
石：石造製品



首里城は、数回にわたる火災後の再建や拡張・修理を経ることにより、現在の規模まで拡大したとされています。地中にはその痕跡となる遺物が大量に埋蔵されており、その種別は屋瓦やせん
壇、釘類、錠前のほか、石造製品などがあげられます。

屋瓦は古い順に大きく高麗系、大和系、明朝系の3種に区分でき、壇は床に敷く方形・三角形のほか、段や下駄状のタイプ、装飾が施される資料がみられます。

釘類の大半は鉄製が占めています。形状は頭部が折れ、断面方形の和釘が占めており、サイズは3cm程度～20cm内外まで多様です。その他の金具として錠前と鍵があり、筒部・バネ部や弦どもし穴など、錠前特有のパーツとして出土しています。鍵は鍵爪部が残ることで判別が可能です。

建物に関する石造製品の多くは、礎石や正殿に付随する欄干の部品で、礎石は方形に加工したものと円形のものが存在します。欄干は細粒砂岩を加工した親柱、笠石、羽目板で構成され、琉球石灰岩の持送り石の上に設置されます。

群雄割拵の痕跡

戦

戦いに関する遺物として、武具と武器があります。武具の類としては、甲冑の部品が多数出土しています。鉄製、青銅製の2種があり、鉄製は主に小札や兜鉢、青銅製は八艘金具や鎮座金具などの飾り金具を構成しており、中には細かい彫刻や金箔が施された製品もみられます。これらの部品は、形状からして中世の日本の甲冑とされますが、兜前立飾の形状は琉球独自のデザインで、月や太陽を現しているとされます。

武器類は鎌や刀剣類のほか、石製や金属製の球が得られています。鎌は鉄製と骨製があり、形状は数種に分けることができます。刀剣類では刀身部の出土は少なく、锷やはばき、切羽などの青銅製品が出土しています。石球は主に細粒砂岩を丸く加工したもので表面には煤が付着し、直径は2cm～12cmとさまざまです。金属製の球は直径1.4cm～2.8cmの青銅製です。これらは火器の弾丸の可能性もありますが、使用法については判然としません。



武器類
上段・右中段：石球
左下：刀装具
右下：骨鎌



武具類
上段：兜鉢、前立
下段：小札、鎖帷子ほか

【column4】 琉球王国の兜鉢立物

首里城「京の内」は、首里城内郭の南西側にある最も神聖なる祭祀や儀式をおこなう空間です。京の内は「神が降臨する聖域」として理解されています。

神々を招来する「京の内」には、五つの御嶽があったようです。京の内の最も高い位置（標高135m）に「首里森御嶽」、岩山の洞穴部分に「真珠森御嶽」、小規模な平場空間には、「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽がありました。

この「京の内」では琉球王国の新国王に託宣を下す“君手摩（天神または陽神）”の神を迎えての歴代琉球国王の即位決定を初め、国王への託宣など、琉球王国の重要な祭祀や儀式が行われました。王国の重要な祭祀・儀式は琉球王国最高神女であった“聞得大君”を頂点とする高級神女“三十三君”によって執り行われました。参考までに第一尚氏王統（1406年～1469年）の最高神女は“佐司笠”であったが、第二尚氏王統から地位を“聞得大君”に譲るが佐司笠は依然として高い神格があったようです。

さて、1459年に起きた火災により焼失した倉庫跡から出土した金属製品の中で、特に注目されたのが琉球王国で製作された兜鉢立物飾り金具です。兜鉢の前面に取り付けられた立物の破片29点を基にして図のような立物飾りが復元できました。西のアザナ跡から出土した立物飾り金具の例からすると本来、立物は銅の上から腐食防止を兼ねて鍍金（金メッキ）を施していたようですが、京の内出土の立物は火災によって鍍金が焼失したようです。

立物の復元に際し、文様構成や民俗及び文献資料などから立物飾り金具（三鍼形台中央にある祓立の中に入る飾り金具の主体となる文様構成から）に「瑞雲日月星文」と名付けました。

この「瑞雲日月星文」の文様意匠を解きほぐす為、便宜的に立物推定復元図へ中央最上部から下部へ、そして左右に番号を付けて解説をします。

- ①「雲」：ニライ・カナイの固有信仰や思想などから「吉祥をもたらす雲」、仏教や道教の「如意」や「如意頭」と酷似。
- ②「月」：月神（月）。「月しろ」は月の異名で神名。神女名として「月」を擬人化して「月しろの大主」。女神。「月」を三日月（日輪と区別する）で表現。
- ③「日（日輪）」：日神（太陽）。テダ思想。地方の按司（豪族）の意味表現が統一国家の成立により国王を表現。男神。日輪を大きな円で表現。
- ④「星」：「子ぬ端星（北極星）」・「七つ星（北斗七星）」・「三つ星（オリオン座の三つ星）」などの星信仰。文様の星の配置から「大ヨチヤ星（ペガサス座の大四角辺形）」を表現か。航海・農業との関連。
- ⑤「植物」：稻・麦などの農作物の豊穣を祈願して新芽を表現か。
- ⑥「鍼形」：鍼形の源流は、鹿の角。日本では鹿角は左右均整で形が美しい事から古くから角を飾り物として兜の前立物に使用。中国では「福禄寿」の「禄」と同音同声で、長寿の仙獸であり、象徴とされる。

以上のように立物飾りの意匠は、本土での類例が確認されていないことや西のアザナの発掘調査で青銅製品の加工生産（羽口、金鍼、坩堝、鋳型）や銭の鋳造の痕跡を示す出土品の他に京の内と同じサイズの鍍金が施された立物飾り金具の破片（「瑞雲」・「月（三日月）」）が出土している事などから琉球王国で独自に製作されたものとして考えられます。本土から輸入された鎧や兜の中には、琉球独自の意匠を追加（加工）して儀式などに使用したり、或いは、中国へ「Made in Ryukyu」の製品として輸

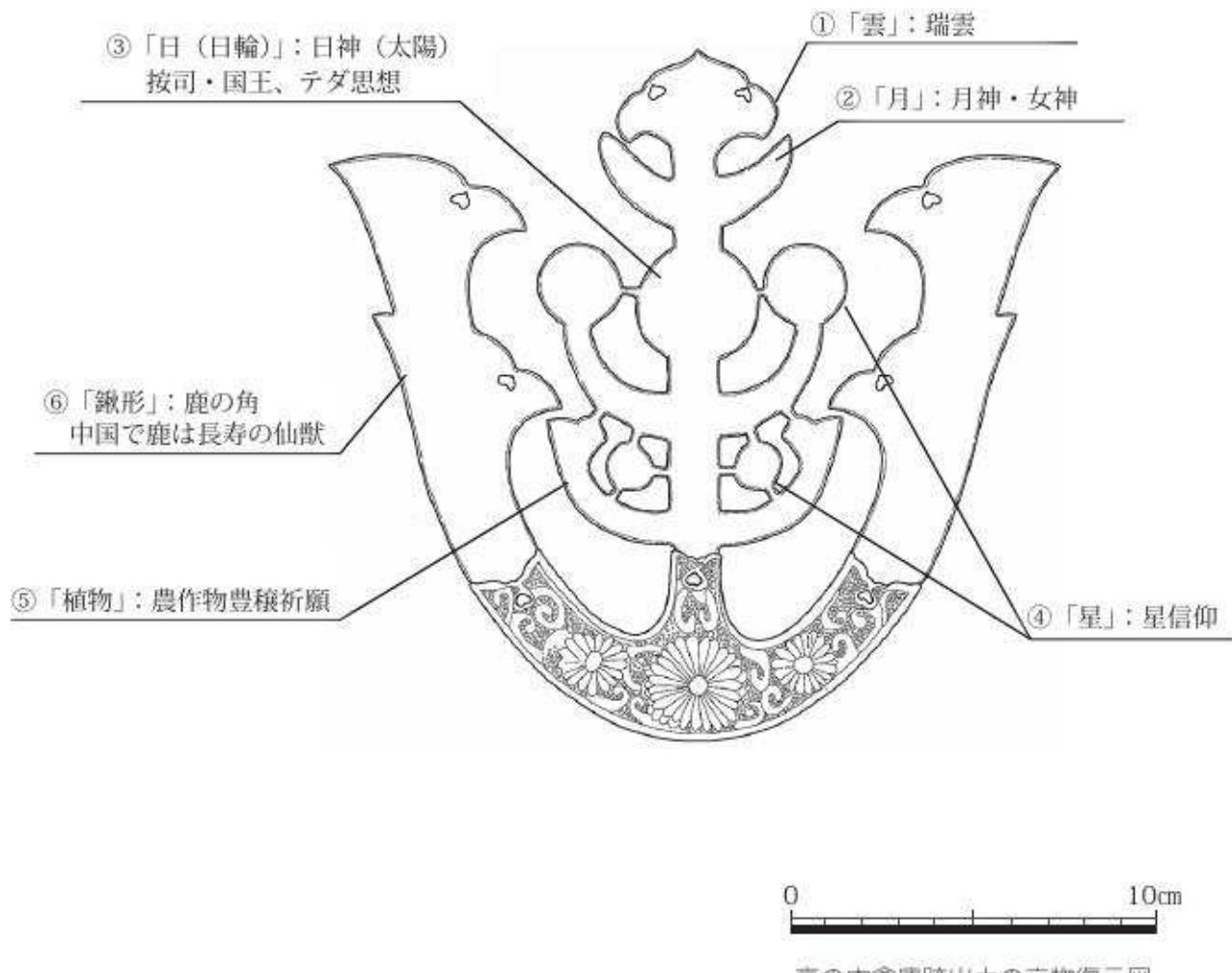
出していたのかも知れません。

次ぎに、この兜鉢立物飾り「瑞雲日月星文」の使用者を考える上で、ヒントになったのが『おもろさうし』第一巻に謳われています。そのオモロとは以下に記した内容の謡です。

5 「一 聞得 大君ぎや 赤の鎧 召しよわちへ 刀うちい 大國 嘴響みよわれ 又
とよ 鳴響む精高子が 又 月代は さだけて 又 物知りは さだけて」
25 「一 聞得 大君ぎや 初め軍 立ちよわちへ 合あて 行きやり 敵 治めわちへ
また と サなかこ 又 鳴響む精高子が」

以上、二首のオモロからも京の内での儀式の際に聞得大君が赤鎧や刀を儀式に用いていたことが容易に理解できます。ただし、倉庫跡は1459年の火災で焼失している事から第一尚氏王統（1406年～1469年）の最高神女であった“佐司笠”を初めとする高級神女達が使用したのかも知れません。

上記のオモロからすると聞得大君が戦の前に先勝祈願などをあこなったことが窺えます。沖縄の諺にある「女や戦の先ばい」の由来もこの時期頃から生まれた諺なのかも知れません。



祈

祈願・祭祀の痕跡

当時、「祈る」ことは国の安寧を願う政治的行為でした。グスク時代の沖縄は原始神道的な自然崇拜に加えて日本から仏教が伝来したこともあり、「祈る」際にも独特の道具が使用されています。陶磁器では香炉や杯など仏教的要素の強い資料以外に、華南三彩の鳥形水注が多数出土しています。この製品は東南アジア地域に分布する例が目立ちますが、彼の地との宗教的観念に類似点があるのでしょうか。また食器である碗・皿などを意図的に埋納する行為も確認されており、地鎮めという考えも採用されたことがわかります。

金属製品には香炉・銚子・鏡・梵鐘・鈴などがあります。このうち香炉や梵鐘は仏教的な意味合いが強く、特に梵鐘は鎮護国家を願って多数鋳造されたようです。銚子や鏡の用途は判然としませんが、鏡は地鎮めなどの目的で埋納された例もあります。このほかに、上記の陶磁器埋納に銭貨を組み合わせる例もみられます。

かなえがき
青銅製 鼎型香炉の把手
出土状況



金属製品（鏡・銚子・香炉・鈴）陶磁器（鳥形水注・香炉）ガラス製品（玉類）

大交易時代の痕跡

財

「財」の遺物として、銭貨をあげました。首里城跡から出土する銭貨には、中国(唐・北宋・南宋・金・元・明・清)、朝鮮、琉球、日本、米国など、各国の各王朝・時代に鋳造された製品がみられます。その多くは中国銭が占めており、古くは西暦14年初鋸の貨泉から清朝までの銭貨が得られ、中でも北宋・明朝銭が多い傾向にあります。日本製では、江戸時代に鋳造された寛永通宝が最多で、そのほか近代銭が出土しています。近世になると、琉球でも無文銭や鳩目銭を中心とする銭貨が鋳造されるようになり、寛永通宝などとともに流通していたことが考えられます。これらの銭貨を、出土数から上位5位までをランクインしますと、①洪武通宝(1368年)、②無文銭(近世か)、③永樂通宝(1408年)、④寛永通宝(1636年～)、⑤開元通宝(621年)となります。





樂・遊・優雅の痕跡

ここでは娯楽や遊具、喫煙具などの嗜好品を「樂」の遺物としました。その種別は、遊具・玩具として人形、ミニチュア製品、円盤状製品、ゲームの駒などがあり、その他煙管、愛玩鳥の飼育に用いる餌入れがあります。

人形やミニチュア製品は型造りで素焼きの製品が多く、関西あたりで製作されたことが考えられます。円盤状製品は、中国やタイ・肥前・沖縄産の陶磁器や瓦の破片を打ち欠いて円形に加工しており、直径2cm～10cm前後まで、サイズもいろいろです。次に、表面に文字が印刻されていることから、中国将棋に用いたと思われる青磁の駒が出土しています。煙管は陶製と瓦質、金属製があり、先端部の形状にいくつかのタイプがあります。トリの飼育に用いたと考えられる餌入れは、外面に籠の格子に固定するための環耳かんじが付くのが特徴です。餌入れは14世紀後半～15世紀前半に位置づけられる中国産青磁と色絵が出土するほか、近世になると沖縄で造られた餌入れが出土するようになります。



玩具、遊具、嗜好品

【column5】 首里城のペット



ヤクシマザルの骨

現在、街なかのペットショップでは、イヌやネコをはじめ、鳥類、爬虫類、魚類、昆虫など様々な動物がペットとして売られています。これらの動物は、今日では誰でも購入できることから、室内外で飼育したり散歩させたりする光景は日常となっています。

首里城から出土した遺物の中にも、城内で動物を飼育していたことを示す資料が断片的に確認されており、これらは人工遺物と自然遺物に大きく分けることができます。ここではこの状況をみながら、首里城内で飼育されていたペットについて考えてみたいと思います。

首里城の御内原北地区と錢戸地区からは、トリの餌入れと思われる焼物がそれぞれ1点ずつ確認されています。御内原北地区の餌入れは中国産の小壺形をした青磁で、14世紀後半～15世紀前半の時期と考えられています。また、錢戸地区からの資料は中国産のモモの形をした鉢形の色絵磁器です。いずれも最大径が5～6cm、高さ3cm程度で、胴部には環耳とよばれる鳥かごの格子に固定するためのわっかが付くことから餌入れとしています。餌入れの出土は、現時点で首里城とその周辺でしか確認されていないことから、王族や士族に限られた習俗であったことが想定できます。そこからは、彼らがたしなむ趣味の一端をうかがい知ることができるとともに、そこに贅を尽くすという優雅な一面を感じさせます。

次に自然遺物はどうでしょう。出土するその多くは、ニワトリやブタなどの食用にしていた動物の骨ですが、中にはイヌやネコのほか、サルの骨も出土しています。しかし、イヌの骨には解体時に付けられたナイフの痕が付いており、ペットや狩猟用のほか、食用にもしていたことが想定できます。サルの骨は2個体分あり、DNA分析によりヤクシマザルであることがわかりました。また、これらの骨には焼かれた痕跡やナイフの痕がみられないことから食用でないことと、歯のすり減り具合などから、野生ザルより飼育ザルに近いという結果が得られています。これらのことから、このサルはペットにする目的で持ち込まれた可能性があります。

首里城において、ペットの飼育がいつ頃から始められたのかはわかりませんが、王府時代の記録には、愛玩・觀賞用、ときには贈答用と思われるトリの名がしばしば現れます。例えば『歴代宝案』によると、尚徳王は1470年に朝鮮へオウムやクジャクを贈り、その返礼として方冊藏經を得ています。その後の記録としては、『評定所文書』にメジロやウグイスの名もみえますので、飼育されていたトリは海外から持ち込まれたもののほか、琉球在来の野鳥も対象にしていたことが想定できます。

このように、出土品や記録からみると、城内では数種類の動物がペットとして飼育されていたことがわかります。

重要文化財指定基準

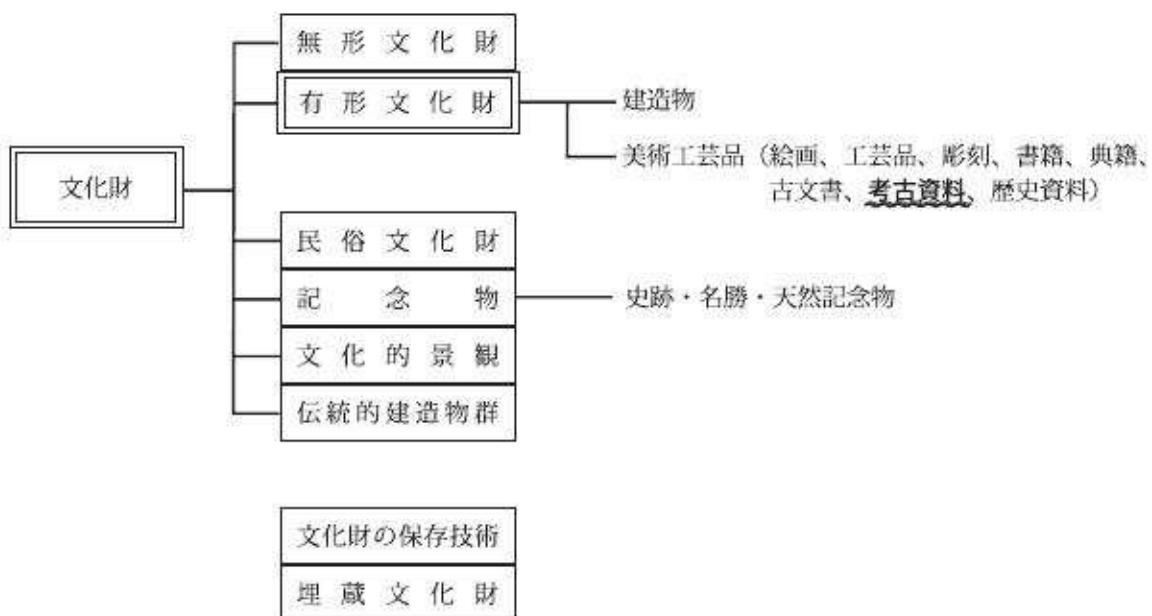
◎ 考古資料の部

重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鐸、銅剣、銅鉢その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衙・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○ 国宝及び重要文化財指定基準、・(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会 告示第2号)〔最終改正〕平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

◎ 文化財の種類 (平成17年4月1日施行の文化財保護法の一部改正により、「文化的景観」が新たな文化財として位置付けられた)



・建造物、絵画、工芸品、彫刻、書籍、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財と呼んでいます。このうち、建造物以外のものを総称して「美術工芸品」と呼んでいます。

国は有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定し、さらに世界文化の見地から特に価値の高いものを国宝に指定して保護しています。

※ 首里城「京の内跡」出土の陶磁器等は、「国宝及び重要文化財指定基準」の「考古資料の部」で、国の「重要文化財」として指定を受けたことになります。

重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所 有 者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

（府保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」

文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成）

説明文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は靈力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である聞得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。^{じゅりやいとうたま}

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6～7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に2点と景德鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が國中に充満する」（訳文の趣旨）とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

（文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋）

※ 官報告示：平成12年6月27日付け文部省告示第120号

※ 文化財保護法（昭和25年法律第214号）第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

重要文化財 考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

重要文化財 陶磁器内訳

種類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青磁 (289 点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	大鉢 1
白磁 (33 点)	碗 14	皿 11	杯 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付 (2 点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付 (58 点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵 (3 点)	碗 2	皿 1	
紅釉 (1 点)	水注 1		
瑠璃釉 (2 点)	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器 (1 点)	碗 1		
褐釉陶器 (35 点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	蓋 1		
白釉陶器 (3 点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器 (55 点)	壺 55		
タイ産半練土器 (22 点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器 (3 点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか (本土産) (6 点)	擂鉢 1	かめ甕 3	壺 2
瓦質土器 (沖縄産) (5 点)	蓋 5		
合計 518 点			

【参考文献】

- 新垣 力 2005「首里城出土の茶道具にみる琉球の喫茶」『淡交』No.728 淡交社
- 池宮正治 2010「王府の祭祀と信仰」『沖縄県史 各論編第3巻 古琉球』沖縄県教育委員会
- 内田晶子・高瀬恭子・池谷望子 2009『琉球彌叢書』 アジアの海の古琉球－東南アジア・朝鮮・中国－』 榎樹書林
- 沖縄県教育庁文化課（編） 1998『沖縄県文化財調査報告書第132集 首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2005a『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第28集 首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2005b『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第29集 首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2006『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第34集 首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2007『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第44集 首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2009『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集 首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編） 2010『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（I）－』
- 金子浩昌 2002「動物遺体」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集 天界寺跡（II）－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査－』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 金子浩昌 2003「動物遺体」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集 首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 木下尚子（編） 2009『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室
- 金武正紀 2000「陶磁器が語るグスク時代の酒器」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化（上巻）』
- 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 菅原広史 2009「首里城および周辺遺跡出土のシカに関する考察」『紀要沖縄埋文研究』6 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 田中克子 2002「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）福建省閩江流域、及び以北における窯跡出土陶磁」『博多研究会誌』第10号 博多研究会
- 玉城 靖 2010「今帰仁城跡周辺遺跡等出土の貿易陶磁」『貿易陶磁研究』第30号 日本貿易陶磁研究会
- 知念隆博 2003「首里城跡出土銭貨について」『紀要沖縄埋文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 萩尾俊章 2004『泡盛の文化史－沖縄の泡盛をめぐる歴史と民俗－』ポーダーインク
- ホルスト・ジークフリート・ヘンネマン 1998「琉球王朝の茶の湯－受容史における喜安の実像と利休流伝来の一考察」『芸術文化叢書1 沖縄から芸術を考える』 榎樹書林
- 向井 真 2008「海域アジアの貿易陶磁とコンテナ陶磁」『九大アジア叢書11 モノから見た海域アジア史－モンゴル～宋元時代のアジアとの交流－』（財）九州大学出版会
- 毛利俊雄 2001「首里城跡管理用道路地区出土の獣類遺体について」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集 首里所跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 毛利俊雄・吾妻健・石神盛敏・川本芳 2001「ミトコンドリアDNA変異を用いた種判別：沖縄県首里城跡マカク古骨と現世種の比較」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集 首里所跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 森達也 2008「コラム29 福建の陶磁器と窯址－日本との関係から－」『東アジアの海とシルクロードの接点 福建－沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化－』 海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会
- 琉球王国評定所文書編集委員会 1989『評定所文書』第3巻 浦添市教育委員会
- 琉球王国評定所文書編集委員会 1998『評定所文書』第14巻 浦添市教育委員会

重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

首里城“もの”がたり

発行年月日 平成23年(2011)1月29日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

印 刷 文進印刷株式会社

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14

TEL 098-994-5777（代） FAX 098-852-3008



第43回文化講座「琉球王朝が繋いだ陶磁の道」

1月29日(土) 午後2～4時 (1時30分開場)

講師：森 達也 (愛知県陶磁資料館)

第44回文化講座「首里城京の内倉庫跡出土の金属製品について ～琉球王国の兜鉢立物を中心に～」

2月5日(土) 午後2～4時 (1時30分開場)

講師：金城 龍信 (当センター)

※先着各140名 予約等不要・参加無料

ギャラリートーク

企画展担当による
展示説明

1. 1月29日(土) 午前11時～11時30分

2. 2月5日(土) 午前11時～11時30分

※先着各30名 予約等不要・参加無料



第45回文化講座

「世界遺産のグスク～最新の発掘成果～」

2月12日(土) 午後1時30分～4時30分 (1時開場)

【講師】 宮城 弘樹 (今帰仁村歴史文化センター) 仲宗根 求 (読谷村教育委員会)
宮城 伸一 (うるま市教育委員会) 渡久地 真 (中城村教育委員会)
仲座 久宣 (当センター)

関連パネル展

1月29日(土)～2月13日(日)

[2月11日(金)・月曜日は休所]



沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751

FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

開所時間：午前9時～午後5時 (入所は午後4時30分まで)

休 所：毎週月曜日・年末年始 (12月26日～1月4日)

国民の祝日 (子供の日・文化の日を除く)

憲法の日 (6月23日)

※祝日と月曜日が重なった時は、翌日の火曜日も休所

その他臨時休所あり

交 通：△沖縄自動車道西原ICより車で7分

△市外線バスターミナル発 那覇バス 97番

「琉大附属病院前」下車徒歩1分